

精神科の先生「うーん。そやねえ」

田所

私「回すの忘れてました。」

先生「ほいほい。」

私「でも、そうつすねえ、あー・・・」

先生「いやでもまあ、いつも言うてる、大半の人はそんなに頭良くないん、バカなんだよって言うてる、ところで、まあ典型例としては、やっぱり取り上げるを得ないところやね。」

私「そうですねえ。」

先生「うーん。」

私「まあまあまあまあ、もう、あー、アクションを起こしてくれなかつたら、それでいいよって感じですねえ。」

先生「うんうん」

私「もうほんとに、ほんとにもう、なんか、次ほんとにおつきな事やってきたらまあ・・・また、考えないといけないんですけど。」

先生「うん、まあ宗教関連の事はもう本人は絶対変わらんやろうから、まあそこに関してとかそこ触れる形で、関わってきたらまああー、また、断絶してるぞって見せつけるような。」

私「はい」

先生「所作をあえて示さなきゃあないなって思っけど、」

私「うん、いやあ・・・」

先生「信じてって言葉もそつやけど、なんか自分にその悪意はないとか、誠実に、良い、良かれと思ってるっていうことはあの、アピールしておかなあかんってのはあるわね。」

私「もう、すごいすよねえ。未だになんか、こちら側があたかもある程度の信用・信頼を持つてるかのように振舞ってる・・・」

先生「ふふふっ」

先生「んー、や、持つてるかっていうか、自分が良い、良ければ、相手が良いと思ってくれて当然という、ことがあるね。・・・いやそれはこつ、信仰心みたいなもんやわな。」

私「はい。もう、うん・・・こつ、自我の中というか自己同一性の中に取り込まれちゃってる、」

先生「うんうん。」

私「しかたがない・・・」

先生「そうやって生きるのが正しいという風に、あー、思ってしまったらもう、こつやって、そこで止まりっぱなしやからねえ。」

私「・・・いやあー、いやあ、しょうもないっすねえほんとに。しょうもない。」

先生「うん、まああの、能力が足りないって切り捨て方もあるけど、まあやっぱり弱いんよね。」

私「うん。」

先生「うーん、そこはもうあの、気の毒やなと思うところもあるわ。」

私「・・・やーなんで、なんでこう、んー、分かんねえの、まあまあ、分かんないから分かんないんでしょうけど。ふふつ、やっぱこう、分かるようになった人は分からない人間は分からないし、分からなくなるし、分からない人間って分かることを分らないですよねえ。・・・うん、むずかしい・・・まあ、んーまあ、血縁者に関してはもうなんかほんとに、まあどうでもいいから。」

先生「ふふつ」

私「まあどうでもいいですけど。」

先生「まあね。まあそこは、別に、血縁だとは言っけれども、お母さんが自分で生きていく方向に、そこと絡み続けないかん道を選ばなければ、全然いいことや。」

私「はい。・・・そうですねえ・・・」

先生「でもやっぱりこうやってあのー、自分のその、弱さとか至らなさとかいうのを、あの、変えないかんとか、あのー賢くならないかん強くなならないかんって言う事を、あの自覚、するっていうこと、耐えられる人間と耐えられない人間がいんのよね。」

私「あー」

先生「耐えられない人間はその、見なくて済む、逃げて済むように、あの、してもらえる理屈があつたら飛びつくし、それを取り込んで自分は今こうこれでいいって言えてしまふ生き方にやっぱなっちゃうよね。なんかあのー、全く、なんて言っん、違うものを持って生まれてきたとは思わへんのよ。田所さん、と例えばお母さんとかね。」

私「ああ」

先生「でもあのそれがこう、分かってしまつとか、克服せなあかんって言う風に、背負えてしまつか、あの背負う事をそもそも、拒否し続けたか

とか、まあそうとこでどんどん違つていったんやるなという感じがあるよね。」

私「うーん・・・」

先生「いやもうお母さんが反面教師になったから田所さんはあのーそうはあかんと思つて、こういう道に來たのは、あるやろうけどね。」

私「そうですねえ。母親といつかまあ、あの家、全てですねえ。」

先生「ふふつ。」

私「なんかあの、うーん・・・」

先生「まあ、まああの、逆説的にあんたらのお陰で今の俺があるという、要素はどうかにはあるー感じやんね。別に感謝する、筋ではないけど。」

私「はい。」

先生「・・・あのー本当にどうでもいいわ知らんわって言えるように、なるっていうのは、そういうところでこう、なんか絡まつたしんどさを、どうほぐすか、を考えて生きてきたっていう段階を超えないと終わらんのよね。うん。それが過ぎると、ああそんな人もいるねそんなこともあったねえで、」

私「ふーん。」

先生「今の自分の、なにも動揺させない、あの、要素やわって言う風に、あのー、距離を変えずに、とか感情的にも反応せずには付き合えるっていうのはいずれ段階的にはくるかなあって期待はするけど、まだあの、そこをどうやって終わらせるかとか、自分を、作り上げるときに、これをどう、どういう風に、あの、始末つけるか自分の中でも、あの、正解をつくるかって言う事を、まあやっぱもがいてる最中ってのがあって、やっぱりあの、揺さぶられるといつか、ちよつと意識したときに、自分が、穏やかではなくなる反応にはなるかなあって思っね。」

私「うーん。」

先生「いやもう、間違いないこう、なんやこう、ちゃんと切り捨ててい
うか自分にその嫌な、要素というか、あの、まあ方向性、修正してい
の、排除して、矯正して、あの、次に進もうという発想にはなってるの
で、まあ時間の問題でいずれどうでもよくなる日がくるかなあって思っ
けどね。」

私「そう、ですねなんかそう、なんですよねなんか最近なんか、その辺の感
覚、まあわりかし強くなって、強くなっていうか、こう、環境が一回、そう
新しい環境に変わって、」

先生「うん。」

私「半年ぐらい過ぎたら、なんか全部、こう、ほんとにどうでもよくなり
そう、な、気がしてて、」

先生「うんうんうん。」

私「あー、家のこともそうですけど、あーのー、大学生活で関わってきたク
ソども、」

先生「ふふふふふ。」

私「とか、まあ、前の付き合ってた人とか、」

先生「うん。」

私「あの辺が、なんか、うん、こう、なんかもう一個、きつかけがあれば
なんか、こう、そうですよね、あーの、まあ思い出なんてものには絶対な
らないですけど、」

先生「うん。」

私「こうー・・・うん、こう、うん、それこそ、肉芽みたいな感じに、
肉芽が吸収された後の、」

先生「うんうんうん。」

私「癬痕みたいな感じに、なっていくかなあっていう感覚が最近、まあ、最
近というか、うーん、なんとなーく、こう、多分、一か月間くらい持って

たのをいま話しててぱっと、上に昇ってきた感じがして、」
先生「うーん。」

私「うーんなんか、うーんそれこそ、結構、そうですよねあーのー、就活で、忙
しくなる前というか忙しく動き始める前、」

先生「うん。」

私「くらいまではなんかもう何かしらにつけてなんか、こう、ああ、思い
出し憎みみたいなことを、」

先生「ああ。」

私「結構してたんですね。二週間に一回一週間に一回みたいな、夢、なん
かその、出てくる、人は、まあ毎回変わるけど。」

先生「うん。」

私「夢にも、まあ毎日一人は誰かしら出てきて、その、あの不快な、不快な
目覚めをするんですけど。」

先生「うん。」

私「あーのー、ぱっと目が覚めるみたいな、なんか毎日あったんですけど、な
んかこう、先の事を、固めつつある、状況に、まあほんとの意味で、踏み
込んだわけじゃないですか試験受け始めて。」

先生「うんうんうん。」

私「で、なんか、あーのー、役所の訪問行ったりとか、なんかこう新しい人間
関係ができそう、というか新しいコミュニティができそうところ、に
触れていつてる、経過の中で、まあーなんか、その辺が、だんだんと薄
れてきたなあという、こうなんか、ふと、話題に出されたり、してもこ
う、まあ、それまでは、結構、表面では笑ってますけど、なんか、でたら
めのおべんちゃらーみたいな感じの、やってますけど、中身はほんとに
はらわた煮えくりかえってるみたいな。」

先生「うん。」

私「感じの、反応だったんですけど、なんかわかりかし、うーんなんか、こ
うー、ああでも若干防衛機制みたいなんは残っててまだちょっと、なん
かどうでもいい、は、まあまあ、まあ今はまだなってるんで。」

先生「うん。」

私「あー、かわいそうな人間たちやなあっていう風にこうある種、」

先生「ああ。」

私「思える、なんかたぶん、こう、一個次の、憎む一個次の段階じゃないで
すか。」

先生「うんうんうんうん。」

私「まあそこもまだ、多分防衛の、」

先生「うん。」

私「中ですけど、かわいそうな人間、まあ実際かわいそうな、というかまあ
愚かなやつらだなあって、感じ、まあこう・・・あの、客観的って言葉あ
んま好きじゃないですけど、まあ愚かじゃないですか。」

先生「うん。」

うち「まあまあ、うちの、客観からみれば愚かじゃないですか。まあその
一個、あのー、一つ機制を突破した先の機制に、入ってきたなあっていう
感じが、して、でそこをだんだんだんだん、こう、自分の、体験の中で
追体験していく回数が減ってきた、ので、夢に出て来るとか、まあ未だに
まあ、出てくることは出てきますけど。」

先生「うん。」

うち「あの、実家の人間だったり、あのークソ、クソどもだったり、」

先生「うん。」

うち「付き合ってた人だったり、出て、きますけど、回数は減ってきて、で
追体験する回数も減ってきたので、まあそのまんま、こう・・・ゆるー
く、消滅していく、感じになんのかなあって。目には見える、傷として、

残ってはいるけど、こうそれを、異質なものとして取り扱わなくなる、感
覚、というかまあ、なんか、まあ、それこそ、傷跡みたいに、なんかこう
触って凸凹してたら意識向きますけど、なんか凸凹してないところで、」

先生「うんうん。」

うち「なんかちっちゃい傷というか、吸収されたところの、瘢痕。まあ見た
ら傷跡だけど、いやまあ、在る。」

先生「うんうん。」

うち「在る。って、存在するだけだよみたい。感じの、ビジョンは結構
見えてる、んで。」

先生「ふーん。」

うち「そうまあ、まあまあ、この、ほんとに、新社会人になったら、」

先生「うん。」

うち「まあそれどころじゃなくなるっていうのも多分、あると思うんですけ
ど忙しさとかで。あるんじゃないかなあって。」

先生「うん。」

うち「思ってるんで、わかりかしこほぐれてきては、いますよねその呪縛み
たいなものが。」

先生「うんうん・・・まあその、無理に、ほぐらせるとか無理に見ないよう
にする、感じないようになるとかじゃなくて、ちゃんとこう、あ、自分
の中ではもうそれ、それだけの価値が、なくなったとか、その、反応する
だけのエネルギーがそこにあの、つぎ込めなくなったなあっていう風に、
変わっていったる感じがあるわね。」

うち「うん。」

先生「すごくこう、良いというか前向きな変化だね。やっぱり。なんか自分
がこう、今までいてた段階と違う段階に移る、違う状況に移っていつて
るっていう風に、自分の中でこう、そういう事に絡まってた状況が終わっ

先生「うん。」

僕「〇〇の、試験が通ってたら、あのー8月の、17・18のどちらかで最終試験なんですよ。」

先生「ほうほうほう。」

僕「ほんで、××の筆記が通ってたら、17日に、二次試験なんですよ。」

先生「あら。」

僕「ほんで、まあ終わった後にそれを確認して、あーなんかどっちか選ばんといけんようになるかしれんなあ。」

先生「うんうん。」

僕「ってなるじゃないですか。で、まあでも実際発表は8と9なんで、まだ

まだ先、というか。」

先生「うんうんうん。」

僕「まあ発表されてから、考えればいい、というか、」

先生「うん。」

僕「それまでは別に何にもこつ、せつつくものとして持ってなくてもいい、じゃないですか。」

先生「まあ両方とも引つかかるといいうすこい嬉しい、」

僕「あ、はい。」

先生「事があつたときに、困るってことな。」

僕「はい。」

僕「で、なんかそこを考え・・・なんか一時期、二日間三日間くらい試験終わつた後、」

先生「うん。」

僕「うん、試験終わった後というか試験中とかもですけど。」

先生「うん。」

僕「試験中と試験終わった月曜日くらいに、なんか、どうしようみたいななんかこう、」

先生「うん。」

僕「焦りみたいになんか、高まっていく感じが、あーこれ被つとつたらどうすればええんやろみたいな、なんか色々まあ、」

先生「ふーん。」

僕「やり方はあると思うんですけど、」

先生「うん。」

僕「どっちか選ぶか、なんか、時間帯別で、こつずれてたら行けるし、でもずれてなかったら、」

先生「うん。」

僕「とか、あと17・18どちらかって言ってるからまあ電話したらもしかしたら行けるかしれんなあとか、まあ色々なんか、可能性、まあでもあの発表あるまで、そんなことに頭を悩ませなくていいじゃないですか。」

先生「うんうん。」

僕「で、悩ませなくていい、のにそっちになんか、まあ、いい、いいでしょ別にとって、まあいいでしょって言いながら別の作業してたんですけど、」

先生「うん。」

僕「こう、隅に、」

先生「まあね。」

僕「こう、出てきて、なんかこう、未だにその辺の、こう、タスクに関する・・・こう、予期される不祥事に、対する、こう・・・事前準備的な焦り不安みたいなんが拭いきれてないなあっていう。」

先生「うんうんうん。」

僕「そんな時すこい実感して、」

先生「うーん。」

僕「でも、まあ、まあ、うーん……そこに関してはもう、何回も数こなしていくしかないよなって思いつながら、」

先生「うん。」

僕「やってたんですけど、一回なんか、いつだったかなあ試験の前の、週から、」

先生「うん。」

僕「（カウンセリング）に行った週のどこかで、なんか、なんかすごい頭ん中が煩雑になった時があって、こう、なんにも考えがまとまらなくなつてなんか、こう思考の種みたいなの、こう考え、考える、」

先生「うん。」

僕「ものの種みたいなの、頭の中でぼーぼーぼーって生まれては消え生まれては消えみたいな。」

先生「はーはー。」

僕「感じになってなんか、こう目の前で試験勉強をするために本を開いてるんですけど、どんどん目が滑っていつて、」

先生「うんうん。」

僕「目が滑るだけだったらまだ疲れてる時とかあるんですけど、」

先生「うん。」

僕「その理由がなんかそういつ、なんか、こう、何かを、考えようと、してる、兆し、の時点で、あのことを考えようこのことを考えようって思つた時点でこうなんかそれが消えるみたいな。」

先生「うーん。」

あたし「すごいいつぱい起きて、こうそん時になんか、あたしはなんか、ボールのなんか、なん、なんていつてたかなあ、んー、こう、頭の中が、反射機構みたいな感じになつて。」

先生「うんうん。」

あたし「こう、破壊性がある、運動エネルギーを持った、いつぱい、粒子が、」

先生「うんうんうん。」

あたし「こう、ぶわあーってランダムに、攪拌というか、」

先生「うん。」

あたし「ぶつかられまくつて、でその、その粒子自体まあ、そもそも最初なんか、おっきい球みたいなものが、数個あつて、こう反射していった中で、その反射であつたり、球同士がぶつかったりして、」

先生「うんうん。」

あたし「どんどん細かくなつていつて、なんか、で、どんどん小さくなつて数が増えて、で最終的になんか、ノイズまみれつていつて、ノイズしかない頭の中、状態になつて、こうほんとに、身体を動かすこと以外できないみたいな、こう、」

先生「反射つていつてなんかブラウン運動を見てるみたいなね。」

あたし「ああー、なんか、ほんとに……あーの、でも最初の方、こう、あれやるかみたいな、あの、皿洗うか、皿洗うか球と、本読むか球と、勉強するか球と、あーやっぱトイレ行きたいな球と、」

先生「うんうんうん。」

あたし「それがなんか動き始めてバーンってぶつかつていつて、だんだんそういう、皿洗うかが、皿球と洗う球としよう球みたいななんかどんどんこう、区切りがなされていつて細かくなつていつて、最終的になんか意味を持たない、粒子の集合、集合が頭の中に、こう粒子たちが、吹き荒れてるみたいな、状態になつて、こう、統率が失われてるというか、そんな感じになつて、そん時はなんかすごい落ち着かないし、やろつとしてることができないから落ち着かないし、」

先生「うんうん。」

あたし「そのノイズで自分が何をしたいのかもわからないし、なんか、すごい挙動不審で気持ち悪かったんですけど。」

先生「うん。」

あたし「まあなんか、次の日も若干、んー、マシにはなってるんですけどそんな感じで、まあでも二日後には、すっかり治ってたんですけど。うーんなんか、そう、そういう、こつ、異質な、ことが、あつて。まあまだ健全と言いつけるには程遠いなあつて。」

先生「そういう時はでもほんと薬、はよ飲んだ方がいいのよねえ。」

あたし「あー・・・」

先生「頓服をねえ。」

あたし「なんかそういうときって、効くんですかね。いま、あの、前そのー、デパスの効き目をめっちゃめっちゃ実感したのは、」

先生「うん。」

あたし「もう、あの・・・殺される！みたいな、こつ動的な、」

先生「うんうん。」

あたし「なんか、あああああああー、やべえ。こつ、すごい、感情の攪乱を伴った、」

先生「うんうんうんうん。」

あたし「感情を、そう、感情の、こついう、過剰、もう過剰も過剰な、攪乱、でなにも・・・なんか、手が付かなくなつて、こつ、こつ、胸、んー、錆びた釘でほじくりまわされるようななんか痛みみたいな体験とかそういう、なんか、いつ殺されるかわかんないみたいな」

先生「うん。」

あたし「切迫感とかそういうものが緋い交ぜになって、手が付かなくて涙ぼろぼろ始めるみたい時に、飲んで、スッ、それらが、こつ潮が引いて

いく波が引いていくみたいになつて、はあぁー、なくなつたわ。みたいな。あーねむたあ。みたいな。」

先生「うん。」

あたし「感じ、の、あのー、感覚はあるんですけど、なんかその時の感覚とは、全然違つて一番、違う点がその感情の動きが全く伴つてなくつて、」

先生「うんうんうん。」

あたし「ただこつ事象がまとまらないみたい。」

先生「うん。」

あたし「統率、事象の統率が全く取れてなくつて、まあなんかそんな、めっちゃめっちゃ、こつ、extraordinaryな、悲しみとか、焦り不安みたいなのは、なくて、それ効く、んですか？そういうのに効く、もんなんですかね。」

先生「うん。あのー、」

あたし「はい。」

先生「感情的な反応はあんまり伴ってなかったって実感はあるやろうけど、そのー、一つ一つのそのー行動の選択とか、あの思考の整理とか、そういうことに対してなんか、まずこれを終わらせようとかこれに、関心を持つてたら今はいいんだつていうような、まあそれで、上手くいくいくはずやつていう、安心感がそもそもない状況やつたはずなんよな。」

あたし「あああー。」

先生「あのー、切迫してるとか、つらいとかはないけど、先これ、いやこつちのほうがいいかな、とかなんかこつ、これではなんじゃなくかみないな、こつ含めて、」

あたし「あーはいはい。」

先生「あの、頭の中が一つのことにとどまるとか関心を持つことを、許せなくなつてるとな混乱がまあ、わーって起きてるんですけど、そうやつ

て、一応やっぱりあの感情じゃないけど神経の活動自体がやっぱりあの、やらんでいい高ぶりがあるんですね。」

あたし「あー。」

先生「だからそこをちょっとこうなだめるって意味ではデパスとか安定剤でいいんですよ。」

あたし「あ、そうですね。」

先生「うん。だからあのちよつと飲んで、あのむしろ、そんなたくさんの方に、あの意識持てないと注意が向かない、気づかないくらい、ちよつと頭を鈍らせて、あの最低限の事しか、興味が持てないというか関心が、あの持てないみたいな緩んだ状態を作って、でやれることだけやろうかって収まるっていう風に。」

あたし「あー。」

先生「していったほうがいいので、今回それ一日二日で済んだからいいけど、その混乱ってあのブレーキ掛けへんかったら、あのーちよつとね、あの、質が悪いというか、長続きして脳がどんどん疲れる、あのー、原因が明確なものがなかったとしても、その頭の構造から勝手に鬱つぱいような神経の疲れ、しばらく動かせなくなってなるような、あの、燃料の枯渇ぶりっていうのは出ることはあるので。」

あたし「あー。」

先生「ちよつと早めに薬飲んでそこから脱した方がええんですね。」

あたし「わかりました。なんか当時は、読んで頭の中に入れるっていうことに集中ができなかったんで、逆にコンサータとかあつちの方のなかになて思ったんですけど。」

先生「あー。」

あたし「それって逆なんです、か？」

先生「うんまずは、あんな、こう、ちよつと暴走気味やなっていう、発想でとりあえずまず、ブレーキをかけるっていうかそんなにこう勢い出せないように、まずしてみる。いう事が先かな。あの、コンサータとか飲むっていうのは、あのーもうちよつと、実感表現難しいけど、あの、色んなものに注意を向けるだけのエネルギーは十分ありすぎる状態なんよね。」

あたし「あー。」

先生「だから一個一個のことをその、気が付いて考えようとはできるけど、考えられないまま、次の事が意識に昇るじゃなくて、これもやれてしまつてもやれてしまつていうのを、一個一個踏み越えながらあの、踏み込み過ぎながら移りすぎちゃうって時にはコンサータ使うけど。」

あたし「あ。」

先生「うんそこはちよつとちがつかない。その、種というかその、考えた方がいい考えられる対象はいっぱい出てくるけど、それをどうこつてできる間もなく次のことがいっぱい見えてくる。」

あたし「そう！」

先生「そういう時っていうのはあの、単にちよつと混乱して、頭が暴走してるっていうだけなので、まず鎮めること。」

先生「・・・まあ、また次おんなじ事あつたらまず一旦、安定剤飲んだほうがいい。」

あたし「わかりました。そうですね、うん、それが、一番気になった点としてあつて。」

先生「ふーん。」

あたし「でもなんか、こう、それ以外の点に関しては、こう、身体の反応的にはあんまり、まあ、特異なことはなかったかなあっていう。」

先生「うんうん。」

あたし「感じーです、ね。あ、一回眠剤飲むのを忘れて、全然寝れなくて、あれ飲まないといけないなって実感したことはあったんですけど。うーん・・・」

先生「今の眠剤ってなんやったけ。」

あたし「えつとー、あの、あれだ、オレンジ色の、名前忘れたなあ。オレンジ色の。」

先生「丸い？楕円？」

あたし「楕円。楕円の、なんか、徐放剤、の錠剤。」

先生「え、楕円で徐放剤、徐放剤・・・」

先生「徐放剤、チックな感じでした確か。あーの、なんか今まで、試してなかったタイプの、その、鬱軽減系の、薬を、」

先生「リフレックスとかかな」

あたし「えつとー」

先生「レメロン、リフレックスではなく、楕円形、トラゾドン、」

あたし「えつとー、いや、トラゾドンではなくって・・・あのもう一個はなんか、すごいぎりぎりにくい、アルミで全部覆われてるような、」

先生「ほう。ああベルソムラか。」

あたし「ああそうです。そうそうベルソムラ。ベルソムラの、なんぼやったかなあ、20、」

先生「うんうん。」

あたし「と、あとー、その、」

先生「オレンジ色の徐放剤・・・なんやろ。」

あたし「オレンジ色、で、」

先生「オレンジ色っていったら普通マイルスリーかなって一瞬思っけどちゃうねんなあ。」

あたし「えーつと・・・あ！今あるかな、」

先生「お？」

あたし「あ、ありますわ。これですね。」

先生「ああー！あーこれは思いつかんかったごめん。確かに徐放剤やんなこれ。」

あたし「はい。これなんか、いまいち、あの一、眠るためとしてあの、服用ですけど、」

先生「うん。」

あたし「調べてもいまいちなんかこう、どう反応してるのか、分かんなくて。」

先生「それはね、あのもともとはあの、抗精神病薬、なんですよ。」

あたし「はい。」

先生「で、あのその時の作用は、あの一頭の働きを止める、」

あたし「ああー。」

先生「やつです。であの一、おなじ成分やのに、あの徐放剤にして、そうもともと鬱の、その気分のしんどい時も、多少効く、まあしんどさを和らげるって意味でね、元気にはしないんやけど。」

あたし「はい。」

先生「つていつのが分かってたので、その、あの薬の名前と、徐放剤っていう作り方を変えて、鬱の薬っていう風に出しなおしたっていう部分がある薬なんですけど、」

あたし「あー」

先生「あの、基本は、頭の働きをとめる、」

あたし「ああ。」

先生「過剰に興奮するとか、その一、どうしてもあのくすぶるような、感情があるときに、しんどさを、一旦は、あの神経の働きを止めることで、打ち消しておいて、良い部分が出てくるように、あの脳の働きかたのパラメータを整えてあげようみたいな、薬になるかな。」

あたし「ふーん、あー系統としては、あれですかあの、前飲んだたオランザピン。」

先生「あつ、まさにそんな感じ。でもともそこちの成分の方が、あのー頭の止められ方が、あのすごい軽いっていつか、」

あたし「ああー。」

先生「評判はいいのよ。」

あたし「そうですね、あのオランザピン飲んでた時はなんかほんとにどんな、こつ人形になっていく感じがしてたんで。」

先生「うん。」

あたし「でもこつちは、そんな。」

先生「だから止められるというか頭の、機能がなんか、欠けたみたいな感覚になるっていつのはこつちの方がはるかに少ない、」

あたし「うん。」

先生「止まり方するんです。」

あたし「なるほどなあ。」

先生「うん。」

先生「でもその二つやったら一回抜いて寝れなかったっていうのは確実にその、あの反動で寝れないじゃなくなつて、」

あたし「はい。」

先生「あのー薬、で、神経を鎮めないと、」

あたし「うーん。」

先生「薬が抜けたことの問題じゃなくなつて、薬が必要な神経の状態であのー睡眠薬必要な段階、状況なんやろなつて感じがあるから。」

あたし「ああ。」

先生「そこはあの、いや、薬が反動で、抜けた反動で寝れないっていうだけやったらもしかしたら、うまくしたらあの、減らしたりやめたり、」

あたし「うん。」

先生「できる道が見つからなくなつてなるけどその二つで一回抜いて寝れないんやったら」

あたし「はい。」

先生「まだ、まだまだ。」

あたし「うんうん。」

先生「まあ状況とかまあ生活環境とか色んなものが、変わりきるまでは、」

あたし「はい。」

先生「あの、やめん方がええっていう風な、ことになるやろな。」

あたし「うんうん。・・・それで、あのー一応処方、寝る前なんですけど、」

先生「うんうん。」

あたし「あのーイフェクサー以外は。」

先生「うん。」

あたし「寝る前に飲んだら、朝ほんとに活動できないんで、あのー、9時くらいに、」

先生「はいはいはいはい。」

あたし「飯後にこれを、イフェクサーを飲んで、9時くらいにこの、」

先生「ビブレッソ」

あたし「ビブレッソと、あのー、あれですね。ロフラゼブでしたっけ。」

先生「ああ、メイラックスのやつね。」

あたし「の、これを9時くらいに飲んで、」

先生「うん。」

あたし「で一時間後くらいに、これを飲むっていう。10時くらいに。したら、まあ朝活動できるかなっていう、感じの、そう最近服薬サイクルを見つけて。」

先生「うん。うんいい調節やね。」

あたし「はい。であんまり、あの、8時とか7時に飲んでると、あの、まあそれでもなんか、5時、6時前とか、6時半とか多分、一回目が覚めるんですけど、」

先生「うん。」

あたし「まだ、あの寝れる。」

先生「うんうんうん」

あたし「もう一回。でももうちょっと、前、7時とかに飲んでると、」

先生「うん。」

あたし「4時とかに目が覚めて、」

先生「あー。」

あたし「それからもうずっと寝れないみたいな、感じになってたんで。」

先生「それは早く飲めば飲むほど切れ目がちゃんとわかんねや。早まんなやね。」

あたし「ああはい。」

先生「ふーん。」

先生「あのまあ、きわどいところなんかうまくおつてる感じやな。」

あたし「うん、ちよつと、あの使い、慣れしてきた、感じはあるので。」

先生「うんうんうん。」

あたし「まあまあまああつて感じで。」

先生「でもその合わせ方は、うまくしてもらった感じやね。」

あたし「ふーん。」

先生「うんうんうん。なるほどね。」

あたし「そう、そんな感じですね。」

先生「・・・うん。それはまあ今の続けていって、まあ忘れたらいかんね、薬。」

あたし「はい。そうですね、ほんとに。あとー、あ、そう今、あの、頓服で貰ってるのが、メイラックスの0.5なんですけど、」

先生「メイラックス？」

あたし「あ違うメイラックスじゃないわ、エチゾラム、エチゾラムの0.5なんですけど、」

先生「うんうんうん。」

あたし「あー、一番最初ここにもらってたのって、」

先生「うん。」

あたし「0.5でしたっけ1でしたっけ」

先生「0.50.5。ここは0.5しかないからね。」

あたし「なんか、あーの、まああの時の、飲んでた時の、感覚のブレが、ブレというか、攪乱され方が、だいぶ動的だったっていうのもあるんか

もしれないですけど、」

先生「うん、うん。」

あたし「あーのー頓服として飲んだ時に、その、院試前の時ほど、こつ、」

先生「うん。」

あたし「身体が、こつ、スツと、ストーンと落ち着くような、感覚、あそこまでこつ、落ち着ききる感覚がないなあって。」

先生「んー。」

あたし「感じだったんで。」

先生「えつと、あー今、その半錠飲んでるやつ、」

あたし「あ、はい。」

先生「あの、あれが本来は、あーデパスの、ちょっと改良版。」

あたし「うんうんうん。」

先生「で、ただ長時間型で効き目がほとんど一緒なんですよ。あー、ベースにその成分が入ってる状況で、」

あたし「はい。」

先生「それでもまだ神経が反応してる、っていうところになるので、あのー、要は全く0の、なにも薬がない状態で薬が初めて入るっていうのと違いもあるし、」

あたし「あーあー」

先生「そのベースにあるにも関わらず薬飲まなあかるところまで、」

あたし「あーあーなるほど。」

先生「神経が高ぶってるっていうところでの、あの、薬飲むっていうところもあるの、そのー、対象となる状態も、ちょっとあの違うしこの落差も全然違うってところがあるから、効いた実感としては前よりも、あのちょっとぼやけてる感じには、どうしてもなまっていくかな。・・・んーでもあの、それはちょっと薬慣れってしてしまってるそこもあるかな。」

あたし「あー」

先生「んーそこはあの、もうちょっとシャープなというか切れ味を求めてって言ったなら、もうちょっと強い安定剤ってあるので、」

あたし「はい。」

先生「その頓服、不十分なんで何とかありませんかって言ったら相談はできると思うんだけど、対応はしてもらえと思うけど、あのーそこまでの事が、要は、あのちゃんと収まるとかもっときつい効き目でないと、その場を自分があの収めきれない乗り越えきれないっていうのになるんだったら要求したらいいだけで、まあ何とかなる程っていったら、強くし過ぎない方が、」

あたし「ああですよな。」

先生「いいと思うね。」

あたし「いやまあ、それこそあの面接のときに、」

先生「うん、うん。」

あたし「あーの、院試勉強してる時とかは、なんかもうほんとに、緊張の種すらなくなってる、むしろ、あーもついいや眠てえー寝ようー」

先生「あははっ。」

あたし「ねむくなってきたああって、ちょっと10分15分寝よって感じになってたんですけど、面接前飲んだ時はまあ、あのまあ多分、おそらく、こう・・・僕も、まあ、分かんないですけど、その、感覚が、長い間、なかったの、」

先生「うん。」

あたし「あのーおそらく正常な範囲の緊張感？」

先生「うんうんうん。」

あたし「こう健全な、人が、緊張するってこんな感じなんかあみたいないな、感じの緊張感、で収まって、でまあ、あの、手が震えることもなく、なんか、そんなになんか身体が反応することもなく、殺されるような、緊張感というか、」

先生「うん。」

あたし「そういう命の危険を感じるような、ものではなく、多分、多分、まあ、こう健全な緊張感なんかなあっていう感じだったんで、まあまあ、いつかって思ってたそのまま、面接に臨んだんですけど、うん。」

先生「まあ、そういう風なあの、感覚やつたら、」

あたし「はい。」

先生「あの、その形で臨むっていう、選択で間違っていない気がするけどね。」

あたし「はい。」

先生「ただまあどっかでその緊張してる故に失敗したかもっていうようなこと経験しちゃうと、まあ飲んどこになるやろうけど、それはなってるから考えて対応していくってかんじやねえ。」

あたし「そうですね、はい。」

私「でまあ、なに言われてもこう、んーまあ答えはできるので。」

先生「うんうんうん。」

私「あとはまあ緊張しないように、メンタル持っていくだけかなあって感じなんで。んーあとなんか、なんかあったかなあ。・・・ああなんか、まあこれはなんか多分そんなに、おっきい問題には発展しないんですけど、」

先生「うん。」

私「あのー、それこそ、その、あのー頭が、暴走してる日に、ネットの訪問の人が来て、あのーの、」

先生「ネットの訪問？」

私「ネット回線の、アパートの、」

先生「ああ、全体で、やってる回線の。」

私「はい。乗り換え、多分あの、終わった後に、違ふところへの乗り換えの奴だったって気が付いたんですけど。」

先生「はーはー。」

あたし「まあ別に、それで、いまあたしが使ってるプラン、学割切れてたって思ってた、あの、ネットの、要は料金下がりますよって。」

先生「うんうんうん。」

あたし「でまあ、その人が全部把握してるような言い方だったんで、あ、そうなんやって思ってた書類書いて、SNSで母親に概要を伝えたら、学割がまだ効いてて安かったのでキャンセルをしたってことがあったんですけど、母親とSNSである程度やり取りをしたんですけど、まあ、そのあと、速達が来てて、昨日くらいに。まあでもこれは写真撮って見せてもらいあないなって思ってたんですけど。内容が、なんか、完全にキャンセルしましたって送ったんですけど、なんか、あの、乗り換えのこととかなんか、こう、自分のなかでこうこう思ってるみたいなのがつうだ書いてあるだけで、なんかある種、あれなんですかね、うちがまだ、多分

こう庇護下にいるみたいな、感じのを、意識してるかわかんないですけど持ってた、こっちが能動的に動いたから。」

先生「うん。」

あたし「なんか、私の、力の及ぶというか、及ばせれる、領域はまだあるんやみたいなのを。」

先生「あー。」

うち「うちに提示したかったんかみたいな、深読みすればまあ、そういうこともみれるかなあって。」

先生「うーん、そう、そういう方向なんか、なんか、あの、自分をこう受け入れてもらえるとか、」

うち「ああ。」

先生「自分の正しさを、またあの、証明できるというかあの、」

うち「うんうん。」

先生「保証する、材料に子供が使えると思って、」

うち「うん。」

先生「嬉々としてこう、絡んできたみたいな押し付けに來たみたいなのや、イメージをちょっと持ちちゃうけど。」

うち「あーあー、こう、そう、そうですねなんか、結局、うん、そう、じゃないすかなんか、自分が正しいから。」

先生「うん。」

うち「こう、うちを自分の傘下に入れとけば、うちは全部正しいみたいな。」

先生「うん。まあ傘下っていうか、んーそやねまあ、上下がどうなるか分らんけどもなんかあの、私が正しい、あの、あのなんていうか、自分で言っんじゃない証明を、子供でできるみたいな。」

うち「ああ。」

先生「道具になつてゐる感じはあるよね。」

うち「なんかこう、最近の彼女の事は多分、先生の方が知ってるんですけど。」

先生「はっはっはっは、ふふふ。でもまあ、ちょっと何回か喋っただけやけどね。」

僕「あーの、それこそ、んー、僕が、ここに通い始める前、くらい、まで、

の、あの人の、親というものの認識、

先生「あー。」

僕「は、あー、保護をする人間について、過剰、過剰というか、病的なまでに保護をする人間。」

先生「うんうんうん。」

僕「なんかこう、対等じゃないんですよ。」

先生「うんうん。」

僕「対等じゃなくって、あの、特に中学辺りくらいまで、

先生「うん。」

僕「は、こつ、子供は無条件に親の言う事を聞くものだみたいなことを無意識に行つていて。」

先生「うんうんうんうん。」

僕「・・・でそれがおそらく続いてるんですよ。続いてるといふか、まあそのイメージがすごい強くて。」

先生「はーはー。」

私「私のなかで。」

先生「うん。」

私「そういうので、まあ今回の件も、そつ、そういうところ、

先生「うん、ふーん。」

私「が、見て取れるのかなあって感じで。」

先生「なるほどなあ。・・・過去の流れから汲むとそういう風に解釈できる

とは確かにありそうやね。」

私「はい。ただまあほんとに、ここ数年の彼女のことは僕は全然知らないんで。」

先生「なんかあー、子離れを、するようになって、んーお母さん自身の存在が、あの毒になるかもみたいなこととか、まあ僕が話すスタンスって

そんな感じじゃないですか。」

私「はい。」

先生「そういうことをなんかあー、お母さんがあー、ほんとに自分が悪かったとか間違つてると言わずに、飲み込もうと、」

私「あー。」

先生「するときの、その折り合いのつけ方っていうのは、あー、支配的、っていうことではもう持たなくなってる。」

私「あー。」

先生「のはやっぱりあって、うん、ちょっとこう、いや本当は、あの優位に立つというよりも、なんかあー田所さんよりも自分の方が、何が正しい何がうまくいって知ってるから、あたしの言うとおりにやったらうまくいくっていう、発想で押し付けたがるけれども、ちょっと、まあ僕が介入して以降は、あー、あなたは、あの子供に、あー、もう及ばんとこるまで、あなたの子供は変わってしもつてんねんといううな、切り口で言うてるのでまあ僕に対する、あー、その僕とのコミュニケーションを上手くやるための、」

私「はい。」

先生「仮面かもしれないけど、なんかあーのそういう、自分に何かしら優位性があると思って、ふるまっていってという態度はもつ、僕にはあんまりみせなくなってるな。」

私「ああー、なんか、ほんとに、あの、こう、んー、まあほとんどの人間がそうだと思いますけど、こう権力っていうものを日常生活に、落とし込んでるといっか、」

先生「うん。」

私「それありきで、生活していつてるといっか、こう歳、歳の差であったり、金であったり、それをあたかも力だと勘違いして、」

先生「そうね、まあ、今は日本ではだいぶ、少しづつ特に都会では薄れてきたけど、まあそもそも男女、の違いだけで、」

私「うんうん。」

先生「なるからねえ。・・・うん。」

私「でまあ、おそらく、地で行ってるのでそれを。」

先生「うん・・・やっぱりこう、なんやこう、立場というか家庭の中の力関係というか、何の根拠がなくても自分がこう人に、支配的というか優位性を誇示できるっていう、既得権益ってみんななんか手放さないよねえ。」

私「そつ、いやそつですねえほんとに。んー。」

先生「それをこう、なんかフェアに、ていっかあの、ほんとにそうなんかって、疑問をもって謙虚になるっていっかは、完全にこう知的に、鍛錬されないといけないみたいやねえ。」

私「あー・・・うん、ほんとに、ああ、前時代の遺物だなあって思いながら、付き合ってますけど、付き合ってるっていつてもほぼ、断絶してまっすけど。」

先生「前時代の遺物っていつか、人間の本质はきつとそつで、」

私「ああ。」

先生「個体ごとにあの毎回啓蒙するってことをしないと、きつとそつにしかならないんよね。」

私「あーあー、そつですね。」

先生「うん、まあ社会的にはなるべくそうなるのが正しいっていつ、こが通用し始めてはいるけど、まあ大多数やっぱり、あの、そういう価値観はほんとには理解してないよね。」

私「もう、なんか、やはりチックにこう、まあ雑な言い方をしたら、」

先生「うん。」

私「やはりチックにぽつと出てきてるじゃないですか今のその流れって。」

先生「まあねえ。」

私「風潮が。で、全然、分かってないじゃないですか実際なんか、それを取り扱った、ワイドショーとか、」

先生「うん。」

私「政治家の演説とか、役所の対応とかみてたらもう、まあ基本的にLGBTとかの情報が入ってくるんですけど。」

先生「うんうん。」

私「あとはフェミニズムとか。ツイッターにはびこってる、内容を理解してないような、アカウントとか見てると、まあまったく違つこと言ってるとか、いやちゃうやんお前らつてなつて・・・。」

先生「うん、あのでも、既得権益とかそついう権力闘争の、反動もあるけど、これまでその、普通に扱つてくれとか、ただその、権利とか尊厳を認めてくれっていつただけで済む、話を、」

私「はい。」

先生「するべき人たちも、結局、権力闘争の枠組みの中で、あの運動してしまつて、あの自分たちでも分かってないやんつていつ風な、結果になることはたびたびあつたからね。」

私「あー。」

先生「なんか、それに関してはあの一、なんかどちらも、不勉強つてのがあるかなあつて思つ。」

うち「・・・なんかほんとに見て、なんか、まあうちもそんなに、周りの人間ほど、きちっと勉強できてないですけどまだ。それでもわかるヤバさが、」

先生「ふふふふ」

うち「すごい、というかまあそれが今の流れの大多数にあって、」

先生「うんうん。」

うち「なんかもっと、そう、根本の話をしたらなんか、権力、とか、印象操作とか、」

先生「うん。」

うち「なんかこう吉本の事件と、選挙と、なんかおっきいのが二つあったじゃないですか。おんなじ期間で。」

先生「うんうん、うん。」

うち「で、なんかもう全部、ちゃんと追って行って、」

先生「うん。」

うち「選挙の事とか全部調べて追っていったら、」

先生「うん。」

うち「え、いや、や、ヤバい、としか言いようがない。」

先生「はははははは。」

うち「いやなんかほんとに汚いことしかやってない、し。」

先生「うん。」

私「それこそ、吉本の件に関してはなんか、もう、もう、社長ヤバいし。」

先生「うーん。」

うち「あの、やり方が。」

先生「結局その程度の人間でも、あのそんな上まで行って社会回せることに、なんねんかっていうもののまあ悪い例やんな。」

うち「あ、はい。あと、あの、選挙期間中の、あの、演説で、」

先生「うん。」

うち「野次飛ばしただけで、野次飛ばしただけでそう警察が、動いて警察に連れていかれたあれ見て、」

先生「はははははは。」

うち「ヤバ、え、ヤバっ！って、独裁政治ひいてるやんって。」

先生「ああ、まあ、んー色々あるけどな。いや野次に関したら、うーん、まあ、反対側もあったしなつてのもあるしねえ。うん、ていうかまああの、

結局、あのー、野次に関してはあの、警察やってくんのは極端やんって思

う反面、」

うち「はい。」

先生「なんかあの反体制活動、」

うち「ああ。」

先生「みたいなこと、に、主眼が置かれてしまつて、」

うち「うーん。」

先生「あのー昨今政策論争でどうこつてはなかつて。」

うち「あー。」

なんかあの

先生「邪魔したろうだけの。」

先生「気に入らんから、あの邪魔して排除して、なんかちよつと、まあ共産

党的な、言えばその革命を成し遂げようみたいな。」

うち「うんうん。」

先生「なんかそういう問答無用のこつ、力の、なんか、なんかあの、行使みたいなのが出てくる場面はあるので。」

うち「はい。」

先生「まあある程度ちょっと、にらみを利かせる必要もあるよねとは思ったけどね。」

うち「ああ。」

先生「んー、全員、全部が全部あのー、野次飛ばしたらいかんって言うんやったらそもそも国会の中で、議論してる人間、議論してる人間が一番野次飛ばしてるんやけどね。」

うち「いやぁ・・・」

先生「うん。」

うち「え、逆の、なんかほかの政党に、野次飛ばしてる、の、あと、あのーの、なんか、プラカードとかあけてるのは、全く警察取り締まらない・・・」

先生「はっはっはっは。」

うち「あのーやばって思っで。あとは、あれですよ、なんか、こう、あのー、候補者が回ってるところに、」

先生「うん。」

うち「旅行バスが、二、三台、」

先生「ああ。」

うち「ついて回って、降りて、プラカードみたいななん渡されて安倍政治賛成みたいなプラカード、で、ああそう、プロ市民の方々なのかな？演説の前で。」

先生「はーはー。」

うち「こうやってみんな、掲げてる。で、それが終わった後に、中身が何かは知らないですけど、モノが配布されてるんですよなんかちっちゃい。」

先生「えーそれはもうほんま選挙法違反やんね、なんかにしても。」

うち「まあ中身がなにか、押さえられてないから何も言えないですけど。」

先生「うん。」

うち「もし、あの現金じゃなくてもティッシュでもだめじゃないですかあれ。」

先生「そうね、うん。」

うち「換金性のあるものだったら全部だめじゃないですか。」

先生「うん、うん。」

うち「んまあ、もし、その、ポチまあポチ袋みたいなやつだったんですけど、」

先生「うん。」

うち「ポチ袋オンリーでも、中に何にも入ってなくても極端に言えば換金性があるってなってしまうから、」

先生「うんうん。」

うち「えダメなんじゃないって。」

先生「うん、そうねえ。なんか協力してくれてありがとう感謝みたいなんだけやったら別やけどねえ。」

うち「まあ、そのなんか、バスに乗ってる人間と、」

先生「うん。」

うち「その、候補者が、あの完全に繋がってるかどうかの証明もなされないっていうのもありますけど。」

先生「まあ、まあね、誰がやってても、でもなあ。」

うち「はい、まあそこはもうなんかもうトカゲのしっぽ切りみたいにしたらどうとでもなるじゃないですか。」

先生「うんうんうん。」

うち「したらなんかそもそも今持つてる権力を、いっぱい、金と権力をもってるやつらがやつぱりどんどん、設けていく仕組みになるんやなあって。」

先生「ああ、まあでもそんなことをやってほんとにみんなが先導されればね。」

うち「うん、いやあでもまあ、結果、見てもある程度多分先導、先導されてるじゃないですかあ、あれ。先導、されてない人間が、100%だったら、文句は、」

先生「いやあ、でもあの、民主党政権でこりこりしたっていうのは本当にまだ引きずってるところはあるわねえ。」

うち「ああ、いやあですよ。はい。なんか、その辺も色々含めて世の中の人間ほんとに何にも、情報を仕入れないしものを考えねえし。」

先生「うん。」

うち「こつ、何も、そう見えるものしかみねんだなあってひしひしと感じて。」

先生「ふふふふふ」

うち「その二つの、事件を見て。ああ、しょうもなくて。こんな世界におってやる義理ねえわっていう、考え方がまた、」

先生「うんうん。」

うち「より一層、こつメーターが、ドゥルルツと」

先生「ふふつ。」

うち「たまった感があります。」

先生「うーんでもそいつらに直接の被害をこつ、こつ受けたらこつさういう

発想はあっていいけど、」

うち「ああ。」

先生「いやねそいつらと付き合うために生きてるわけ違うけどねえ。」

うち「ああーそうですねえ。」

先生「うん。」

うち「ああ、そつかまあそつだよなあ。」

先生「なんかあのー俺の目に入るものが汚いってのと単に俺が不愉快、不快やわっていうことに関しては、」

うち「ああ。」

先生「なんか自分の人生邪魔されてるわっていう感覚はちょっと出てもいいとは思っけど。」

うち「ああ、うーん、やなんかこつ、うーん、不快、うーん、不快なんですよねえなんかすげえ、こつ大雑把で、暴力的な言い方したら馬鹿嫌いなんで、好きじゃない、ねーまあこつ、あの、バカにこの、うーん、今まですげえ迷惑をかけられてきてたんで。」

先生「んー。」

うち「馬鹿嫌いなんですよ。そう。」

先生「たぶんねえ、それはあの、また、こんなこと、言い方がちょっと申し訳ないけど、あの一時期あの、大体あの、そんなことになる。」

うち「あー、うーん。」

先生「うん。で、それあの通り過ぎるねんいつか。」

うち「ああ。」

先生「馬鹿大ッ嫌いっていうのが、あの・・・なんか、反応しなくて、あのー、スルーして、っていう風に、やり過ごして、も、そのー、それ以上、あのー自分の世界っていうかまあ馬鹿じゃない人たちとの関わりとか、」

うち「うん。」

先生「まあ自分の居場所の整備とかが進むとかっていうのが起きると、そういう、そこをなんか世界のおちこちにあるけど、関わらずに、あのー自分の生活はそこそこの、あの、居心地の良さで作れるなあみたいにな。」

うち「ああー。」

先生「ことができてきたら、あの、関わらないように生きようっていう、あのー知恵は、ちょっと使っけど。」

うち「はい。」

先生「あのーいちいち反応してやる程の、」

うち「うんうんうんうん。」

先生「あの生き方っていうか、あの労力って、」

うち「はい。」

先生「実はいらんねんっていうような、あの、どこまで行けるわ。」

うち「はー。」

先生「んーいやあのー実際色んなところで、どうしても関わらなあかん時に馬鹿がいるっていつのはいつでもあることあり得る事やねんけど、」

うち「はい。」

先生「あのー、そういうやつとのやり取りを、自分がしないと生きていけないっていう事に、ならず済むってというような生き方って選べるのよね。」

うち「うーん。」

先生「んー、それはね、あのー、いずれ終わる。その、馬鹿を許すでもなく、」

うち「はい。」

先生「自分があのー、馬鹿を愛せるようになるでもなく、」

うち「あー。」

先生「うん。なんかあのー別の、あの、ところで生きてたらもういいやつて、いつてそれはそのー、受け入れるとか許すとかじゃなくて、もう、あのそんなもんなんやろって言うて、なんかあの、フーンって言うて、それ以上の意味付けとか、あの、関連性の整理とかせずに、終わらせれるようになってっちゃう。」

うち「ああ。」

先生「うん。あのー、でも、その前にだいぶ、その馬鹿嫌いって言うて本気で憎んだり腹立てたりするひと手間って、残念ながらいるんよ。」

うち「うんうん。」

先生「その先に進むために……でもあの、感覚は、あの僕は、全然間違っていないと思うよ。うん……だって言うてもわかんないし、変わってもくれないんだもん。」

うち「うー、いやあそうなんですよねえ。ほんとあきれ果てる。」

先生「うん。なんかそれが自分に影響を及ぼすっていうことがあり得ること自体がもうそもそも、許しがたいっていう風になっちゃうので。」

うち「はい。」

先生「うーん、で、あとそこに反応するとか自分が、なにかこう、影響を受けるみたいなことがなくっても、まあいずれ、自分の生きてる場所とか生き方、に関しては、あのーそこなしで、成立させれてるなっていう風に、言える日が来ると思う。」

うち「うん。」

先生「こう、上手くやっていこうじゃなくて、なんか馬鹿のコミュニティとか、馬鹿の世界・文化っていうのはあるんだな、ふーんで終わる、みたいなね。」

うち「うーん。」

先生「まあそれとこうなんか、自分なりの、その、もの、受け入れるとか自分が満足できるもので、違うものがちゃんと自分の周りに用意されてしまつのよ。いずれ。同じように生きてるはずなのに、なんかあのー、絶対あんな嫌っていうのと、あの似たようなこと、自分はこれがいいわっていうのが、おんなじ、全くおんなじことをしてるような、あの見え方で、勝手に、あの成立するっていう風な、ことが起きてくる。……それをなんかある意味生きる場所作りっていうか、自分で生き方決めるっていう事かなあって思ってるんね。」

うち「ああー。」

先生「あのー、うん、すごい、大事な、健全な感情なので。」

うち「はい。」

先生「これは、こつ、こついう場所ですつたらいかんこと、特に田所さんに言っべきことじゃあんまないけど、基本その、なんか馬鹿を憎むとかっ

ということから始まって、さっきの特権意識じゃないけど、人を蔑む差別するとか、あの嫌うとか、あのー、不寛容になる、っていうのって、本能的に必要な感情なんよね。」

うち「ああ。」

先生「ある程度。まあそこをあのー、折り合いつけるといいうか、ある、そういう気持ちが考え方反応の仕方が良くないっていうと、それこそ白痴に
なんのよな。」

うち「んー。」

先生「なんかあの、博愛とか平等とか、そういうこと言うてはみるけど、その宗教みたいな、もんで、無批判にすべてを、容認しよう、っていう風に、そんなことをすると、あのー、自分で考えることをやめただけやないか。っていう、ことになっちゃうのよな。」

うち「うん。」

先生「やっぱりそういう事をそのー、悪い感情とか反応も、込みで、自分が、自分の中でそれが、自分にとって正常とか、自然とか、正当性がある。っていう風に、考えることでちゃんと構成されることが大事。なあ。まあそれに今の、感情を、あの、言ったらいかんことやるなという風に、なんか気が引ける方向を勝たせるんじゃないくて、」

うち「はい。」

先生「あの自分の、そう思う事はでも自分は正しいから、そこを進めるしかない、言う風になる方が、まあ自分にとって、絶対に正義なんよね。」

うち「んー。」

先生「まあそれがあの、田所さんの場合はあの、人を踏みつけようとか、自分の権力を、あの大きくしようではない、っていう事をわかって、やれてるから、まああのうまく辻褄が合う形で、あの納得いくように、作れると思うので、あのー、なに、はた迷惑でない形でね。」

うち「うん。」

先生「だから、良いことやと思うけどね。・・・うん。まあ、ちょっと世の中で事件とかそういう神経の動きがあると、いっぱい矛盾が目につく、目につくといつかあの、考えの、思慮の浅さが目につくよね。」

うち「はい。」

うち「やあそなんですよんー。ほんとに。」

先生「それがあの、分かってしまつ、時点じゃあないわ。」

うち「ふふふつ」 先生「はっはっはっは」

先生「分からない幸せがあんねんっていうのを」

うち「んー。」

先生「横目で見ながらね。」

うち「そうですねえ。まあ、数がある以上、仕方がない。」

先生「ほんとに、色んな、あの、性質の人間が、あのうまいことして散らばるようにしか設計されてないの。」

うち「うん。」

先生「良いものが、あの増えるようには設計されてないっていう風に、まあ受け入れなあかんからねえ。」

うち「はい。」

先生「まあ、まあぼちぼちと。」

うち「はい。」